

大庭みな子

海にゆらぐ糸

大庭みな子

海に
ゆらぐ糸

講談社

海にゆらぐ糸^{うみ いと}

一九八九年十月二十日 第一刷発行

著者——大庭みな子^{おおば こ}

© Minako Ohba 1989, Printed in Japan.



発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話東京三—九四—二二（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——牧製本印刷株式会社

定価——一八〇〇円（本体一七四八円）

著丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-204242-8 (文1)

目次

サシモンベリイ! ベイ
鮭 5

キャンドル・フィッシュ
ろうそく魚 37

べつべつの手紙 73

糸巻のあつた客間 103

海にゆらぐ糸 137

フィヨルドの鯨 165

黄杉 水杉 179

装帧
田村義也

海にゆらぐ糸

鮭^{サーモン}
莓^{ベリー}
の
入^{イン}
江^{エイ}

ピッツァパイは日本でもいつの頃からか、若い人たちの間で愛好されるポピュラーな食べ物になったが、わたしがピッツァを初めて食べたのは、サーモンベリイ・ベイのニーナの家だった。多分、一九五〇年代の末頃だっただろう。

ニーナはわたしの親しい友人、オリガの母親で、セント・ミカエル市内から三キロばかり離れた海辺の林に、夫のトーマスと二人で住んでいた。

アラスカ州セント・ミカエル市は前世紀半ばまでは北アメリカ西海岸ではもっとも栄えた町で、サンフランシスコやロスアンジェルスがせいぜい人口数千の寒村だった頃、二万の人口をかかえた文化の中心地だった。

けれど、こんな状況はたった一世紀の間に逆転し、サンフランシスコやロスアンジェルスは世界中の若者たちが憧がれる世界の都市になったが、セント・ミカエルなどという町は地球のどの辺りにあるのかも知らない人たちが多い。

現在のセント・ミカエルはシアトルかアンカレジ経由でジェットの発着する町ではあるが、一九五〇年代にはシー^ホオター^ニと称する数人乗りの小さな水上飛行機で行くしかない田舎町だった。だが、それだけに、霧の中から忽然と、幻のように浮かび上る妖精の住む町といった感があった。更にこの現実のセント・ミカエルの背後を覆う巨大な怪鳥の黒い影こそがわたしをわくわくさせるのだった。

セント・ミカエル地区の土着民たちが伝える古い民話にサンダーバードという空想の怪鳥がいる。日本語に訳すと雷鳥となるが、雷鳥は高山に棲み、碌に飛べず、よたよた歩く汚れた雪のような羽を持つ現実の鳥だからこの訳はふさわしくない。せめてナルカミとかイカズチとか言った日本語を使った方がよいかもしれない。もっともわたしが今心で描いている幻の怪鳥はイカズチ鳥とかナルカミ鳥とかいうのでもなく、音もなく、空一面をその巨大な翼で覆い、からだごと、辺りの草木と一緒にふわあっと風に巻きこまれるような感じをひき起す、目に見えないへんなものだ。

そうかと思うと、フィヨルドのひそかな入江にうずくまって無心に餌をついばんだりしている。そういうときは優美な白鳥か、せめて若い鷗に似たたおやかな姿に形を変えている。

サーモンベリイ・ベイはそういう怪鳥のたむろする入江だった。その名のよう^{サーモン}に、^{ベリイ}鮭の繁みに覆われたフィヨルドの窪みには何軒か家があり、彼らは必ずしもお互いに仲がよいというわけではなかった。

サーモンベリイはサーモンピンクの香りのある野莓で、ぶつぶつと舌に当るかなり大粒の硬い種子があるので、そのままジャムにするのには適しないが、漉してジェリーにする^{とよい}。

さて、ニーナの家に辿りつくには、ハイウェイで車を降りてから樅やえぞ松の林を縫って十分ぐらい歩かなければならなかった^{ので}、冬の雪の日などは老いたニーナには大変だった^{だろう}。

もっともその頃、ニーナはまだ六十代だった。世界中こんなに長寿になった現代では、六十代は大して年寄りとは思えないが、二十代のわたしから見れば、とても年寄りに見え^た。

それに、もしかしたら、ニーナは実際の年よりも幾分老けて見えたかもしれない。ごほと咳をしていたし、痰を咽喉にからませて、割れた声で喘ぐようなものの言い方をしていた。

「母は晩婚で、わたしは母の三十八のときの子よ。母は父より八つ年上なの」

オリガは言った。オリガはわたしと同年で、子供を二人連れて離婚した女だった。

ニーナはなんとなく人眼を惹く人だった。町の、ちょっと気の利いた社交界にはいつも姿を見せて、粹で大胆で、知的な匂いのする会話で、その年代の男たちを魅きつけていた。ずっと若い青年たちでも、彼女の話を目白いと思い、耳を傾け、つい親切に腕を貸す気になった。

ニーナは、そういうふうには恰好よく、若い男に腕を支えられたりする仕草が身についていたし、よたよたするにしても、なんとなく優美だった。青年を騎士の気分にする面白いおばあさんだった。

ある日、わたしはオリガと一緒に、ニーナのランチに招かれた。そのランチがピッツァだったのだ。

わたしは生まれて初めてピッツァというものを食べた。その頃、アメリカで若い人たち

の間に流行し始めていた食べもので、年の人でも新らしがり屋は、若ぶって作ってみる料理だったのだろう。

ニーナの手作りのピッツァは非常に創作的なもので、肉屋のソーセージではないニーナのソーセージに、いろんな魚肉やオリーフの実や茸などがたっぷり入った贅沢なものだった。

香辛料やチーズはイタリア風ではあったが、魚肉は土地の海で採れる鯧や鮭を北国風に塩漬けにしたり、燻製にしたものが使っており、茸はニーナが家のまわりの林で摘んで漬け込んだものだということだった。

複雑な、天下一品の味——あとにも先にもわたしはそんな美味しいピッツァを食べたことがない。

その上、料理の味ばかりではない、ニーナの家のその雰囲気、なんとも独特のものであった。

わたしはニーナの家の居間の窓から、眼下の深いフィヨルドを見下ろしたとき、自分が夢か幻の国にいるような妖しい気分になった。

フィヨルド——太古の氷河が削りとった深い峡谷の細長い入江の対岸には、切り立った

崖を落ちる細い滝があり、滝の上に差しのべる木の枝には、妖精のヴェールを想わせる薄緑の絹に似た苔がかかっていた。滝の流れ落ちる翡翠色の淵に遊んでいる白い水鳥は、脱いだヴェールを枝にかけて沐浴する妖精を想わせた。わたしは日本の天女と漁師の物語、天の羽衣の話を思い出した。

オリガがチエーホフの「三人姉妹」の姉娘の名前であったように、ニーナは同じ作家の「鷗」の若い女主人公の名だった。白い海の鳥、鷗の化身めいた女主人公の役を、わたしは学生時代、学内劇で演じたことがある。演じながらわたしはさめざめと泣き、相手役の顔が霞んで見えなくなった。

突然、ニーナは若く美しい娘になり、そばに坐っているオリガとの境い目が定かでなくなり、わたし自身との境い目も定かでなくなり、そのうち、わたしたち三人は、三羽の白鳥になってしまい、優美に首をさしのべて、その首をゆっくりとたわめて、翼の間にさし入れたりして、人間の言葉か白鳥の言葉かわからないような言葉で笑いさめきながら、ピッツァを食べているという妙な感じになった。

目を上げれば、フィヨルドの眺めは絶景で、ニーナの居間にはわたしの親しい人たちの亡霊が立ったり坐ったりしていた。パイプを口に咥えたり、だらしなく着た部屋着の裾か

ら毛脛をむき出しにしたりして部屋の中を歩きまわり、ごほごほと咳込んだり、にっと笑ったり、蔑んだ眼つきでじっとこちらを透し見たりする人たちがいた。

つまり、ニーナの居間は、ジョイスだの、ゴンチャロフだの、シェークスピアだの、ブルーストだのシャーウッド・アンダーソンだのの本の倉庫だったのだ。したがって、ニーナが腰かけたり、オリガが歩いたりするすぐ後に、そういう人たちが黒子みたいに立ったり、坐ったりうろうろと歩いているという風だった。

ありとあらゆる壁や間隙にしつらえられた本棚に、乱雑に突っこんである古びた金文字の背表紙の本は、ペーパーバックではなく、立派な革表紙のものが多く、みんなよく読まれていた。源氏物語や老子の英訳さえあった。フランス語やロシア語の本もあって、ひどく大きな百科事典のような重々しい感じの本もあった。

そう言えば、ニーナはフランスに長くいたことがあるそうだし、アメリカ生れだが、両親がロシア人で、子供の頃はロシア語で話していたそうだし、またきちんとしたロシアの知識階級の教育も受けたということだった。

こういう種類の本を、普通のアメリカ人が読まないのは、日本と全く同様である。わたしは学生時代に戻った気分で、しばらくニーナの書庫の前に立ちつくした。するとオリガ

が近づいて来て囁いた。

「この町に、母のたわごとを聞いてやってくれる人がいるとすれば、あなたぐらいじゃないかしらと思って、あなたをここへ連れて来たってわけ。

まあ、母の言うことは、大抵、そこにある本のどこかの頁からとび出して来るものじゃないかしらん」

オリガは笑った。すると、ニーナは素早く言い返した。

「この人たちだって——こういう本を書いた作家たちのことよ——べつにその言葉を自分で創り出したわけじゃないでしょうよ。彼らは、母親の口移しに聞き覚えた言いまわしに加えて、ありとあらゆる場所で、拾い集めた他人の言、草を、意地蔵く溜め込んで——古道具屋の物置みたいに山積みされた言葉の屑箱の真中に坐り込んで、精神病院の患者が日がな一日屑を紡いでじゅうたンを織るように、小説と称するじゅうたンを織っただけのことじゃないの。はっはっは」

ニーナの高笑いは腹れて、一種異様な、それこそサンダーバードの啼き声に似た、幾条にも割れて鳴り響く豪快さがあつた。

ニーナは愛読した作家たちの紡いだじゅうたんに坐り込むなり、乱暴にその織りむらを